

地域に開かれた日常的な場面での子ども参画の実現

—子どもが主体的になっていく様相と大人の存在に焦点を当てて—

山下 智也

1. 問題

1-1. 子どもの活動場面

近年、地域教育運動としての従来の子どもの活動に加え、学校の週五日制などの社会背景によって子どもの体験学習の重要性が指摘されることから、新たな子どもの活動場面も生まれている。その活動の場は、学校や地域、第三の場など多岐に渡る。また、その中でも子どもの主体性を重視する活動場面において、「子ども参画」の手法が注目されている。

1-2. 子ども参画論

自らの実践を元に「子ども参画」を論として体系化したロジャー・ハートは、子ども参画を「人の生命や人間が暮らすコミュニティの生活に影響を与える意思決定を共有するプロセス全般」と定義した(Hart, R., 1992, 五十嵐 (2000) に引用)¹⁾。また、子どもの参画形態を8つに分けた「参画のはしご」モデルは多くの子どもの活動場面で指標とされている。さらにハートは、子どもが幼い頃から社会へ参画することで、真の民主主義を実現する社会改革を目指している。

ハート論に欠けた視点を補う形で、その後も複数の参画論が提唱されたが、どの参画論においても、参画を通して子どもたちが自然と主体性を発揮することを想定している。

1-3. 日本における子ども参画実践とその限界

日本では、ハートの子ども参画論を元に、児童施設やフリースクールでの子どもの居場所作りとしての参画実践、あるいは子ども議会や子どもの権利条例の策定を通して子どもが社会参加を目指す参画実践が各地で取り組まれている。

1-3-1. 大人が子ども参画を始めてしまうという問題

子ども参画実践の中には、子どもに参画させようとして大人が実践を始めてしまうという事例も多い。しかし、果たして子どもたちは、大人の関心・問題意識に固められた実践の中で、主体性を発揮できるのだろうか。

古賀 (2004) は「どこか性急に『子どもが大人の社会の中で発言し、活動できるようにしなければ』と導こうとする大人の意図を感じる」とした上で、「子ども自身のなかから湧き上がる『やってみよう』という気持ち」の重要性を述べている²⁾。つまり、大人が子どもに参画させるのではなく、子どもたちの中から主体性が生まれ、それが子ども参画へとつながっていかねばならない。

では、子どもが主体的に子ども参画の活動を始めるためには、大人はどのような関わりをすればよいのだろうか。大人が子どもに参画させようとするのではなく、あくまで子どもの主体性を保障し尊重していくことによって実現される子ども参画のあり方を見出す必要がある。

1-3-2. 非日常な場面では実践が行われにくいという問題

子ども参画の実践が往々にして非日常的な場面で目指されることによって、時間が限られている中で成果が求められるという問題性や、大人が誘導し「操り参画」になってしまうという危険性が生まれる。さらに、地域との乖離によって、一部の子どもに限られた権利になってしまいかねない。子ども参画はそもそも、全ての子どもの基本的な権利の一つである。よって本研究では、子ども参画が非日常的な場面で一部の子どもの権利として閉ざされるのではなく、日常的に子どもにも開かれた場での子ども参画の実現に注目する。

2. 目的

本研究では、(I) 地域に開かれた日常的な場面において、子どもの主体的な気持ちをもとに、どのようなかたちで子ども参画の実現が果たされるのかを、事例を元に提示する。

その上で、(II) その場における大人の存在・関わりと場の様相を明らかにする。それによって、子どもの主体性を保障した子ども参画のあり方を提示する。

3. 方法

本研究の研究対象には、箱崎商店街きんしゃい通りに位置する日常的な子どもの遊び場「きんしゃいきゃんぱす (以下「きんきゃん」とする)」を選択する。きんきゃんは、「大人が子どもに参画させるように仕掛けていない子どもの活動場面であること」、「日常的に展開され、多くの子どもたちに広く開かれた場であること」、という本研究の対象条件に合致する。また、きんきゃんは筆者らが運営している場である。

本研究の手法には、参加観察法を選択した。具体的には、きんきゃんが誕生した2004年7月から2006年1月(一年半)にかけて、平日にはほぼ毎日きんきゃんを開放するというかたちで、フィールドワークを行った。

参加観察によって得られたさまざまなデータの中から、子

どもの主体性が現れており、その活動が子ども参画へと繋がり得る場面を抽出し、KJ法を用いてそれらのエピソードを分類した。それによって、きんきやんでの子ども参画のあり方を整理し、事例報告として「結果と考察Ⅰ」に提示した。

さらに、それらのエピソードの中から、本研究の目的に合致する代表的なエピソードを複数選択した上で、それらのエピソードの中にある「大人の存在・関わり」と「場の様相」を、本質を失わないように解釈して取り出し、考察を加えた。それらが「結果と考察Ⅱ」である。本研究では、筆者のその場での体験がエピソードとして現される（それはその場を共有する他者の体験に寄り添い得る）ことで、その場の現象をありありと映し出すことが可能となる。また、捉えたい「大人の存在・関わり」や「場の様相」は、時間の経過や人々の関係性の変容に伴って刻々と変化し得るものであり、それらはエピソードというある程度のスパンで捉えることが必要となる。以上がエピソード分析を用いる理由である。

4. 結果と考察Ⅰ：事例報告

抽出されたエピソードから、地域に開かれた日常的な場であるきんきやんで、「子どもの居場所への参画」と「地域への浸着としての参画」のかたちが見られることが明らかになった。また、それらは単独のエピソードからその子ども参画の実現が見出されるのではなく、日常の積み重ねによる大きなプロセスの中に見出されるものであった。よって、そのプロセスに沿ってそれぞれの参画を提示すると共に、それらを通して子ども参画自体の捉え直しを図る。

4-1. 子どもの居場所への参画

まずは「子どもの居場所への参画」のかたちである。その

プロセスは図1に示される。

きんきやんは日常的に地域に開かれた場であるため、子どもたちにとってアクセス可能な場所である。きんきやんを拠点とし始めた子どもたちは、日常的にきんきやんで遊ぶことによって、次第に居ることが当たり前になり、自分たちの場所として捉えるようになった。その現れとして、子どもたちがきんきやんの運営に関わろうとする様子が認められた。

日常の重なりによって土台が固められることで初めて、子どもたちは遊びの中から「子ども会議」などの自治を生み出した。さらに、子どもたちが発案したクラブや活動も誕生する。子どもたちの主体的な運営が生まれ、「クラブ」などの継続的な形をとったことが特徴的である。

ただ、子ども会議やクラブ活動は必ずしも民主的ではなく、やはり遊びの範疇である。しかし、形式を重視しながら大人が子ども参画を始めるといふあり方よりも、子どもたちが「自分たちの場所」であるきんきやんに関わりを持つようになり、自分たちの主体性をもとにその場での活動や運営に関わろうとするそのあり方こそが、子ども参画の本質を捉えたものであり、実現であると言えよう。

4-2. 地域への浸着としての参画

次に、「地域への浸着としての参画」のかたちである。そのプロセスは図2に示される。

最初はきんきやんの周辺に閉じていた子どもたちの遊び場も、日々を重ねることによって、きんきやんの中から路上へと展開し、近くの公園やまちへと広がっていった。また、商店街で遊ぶだけでなく、商店街そのものを遊ぶという様子も見受けられ、子どもと地域との接点が様々な場面で生まれてくる。そして、次第に子どもたちは商店街を身近な場所と

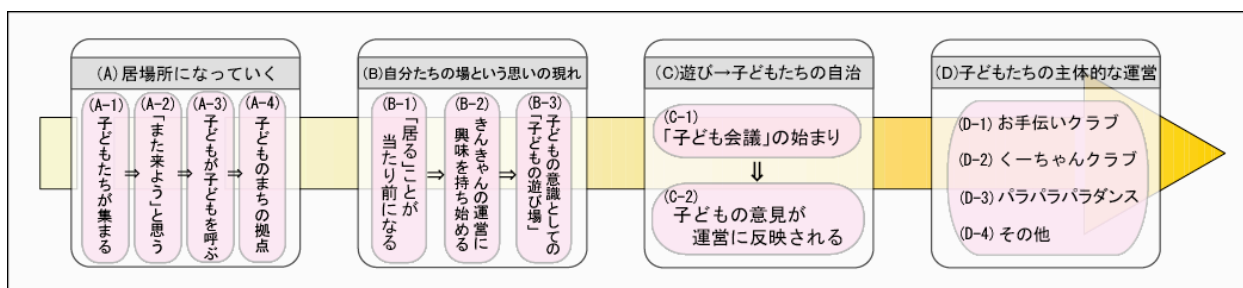


図1 「子どもの居場所への参画」のプロセス

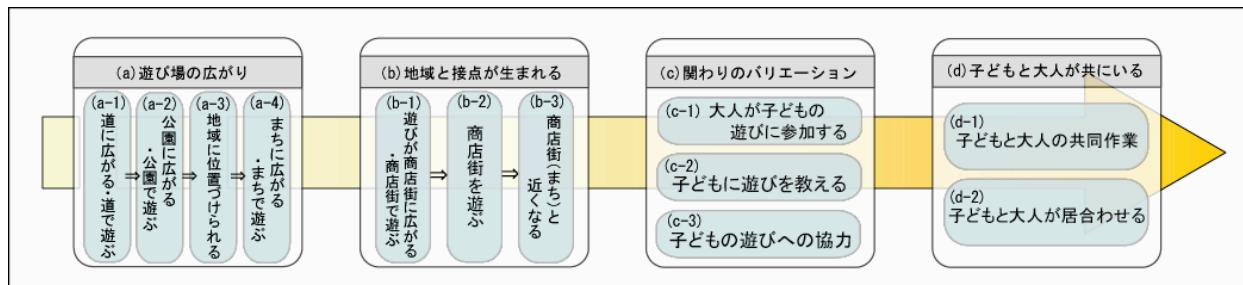


図2 「地域への浸着としての参画」のプロセス

して感じるようになっていった。このような土台ができることで、子どもたちは地域の大人と多岐に渡った関わりを見せる。これらの場面に共通して見られるのは、子どもと大人がお互いを巻き込み合いながら遊び、関係性を築いていくという点である。そして、遊びという媒介がなくとも、子どもと大人が自然にまちの中に居ようになる、さらには共同作業をする場面が生まれるのである。コミュニティの崩壊や、子どもの地域離れが叫ばれて久しい近年、そのような大人と子どもの関わりを生む場としてきんぎゃんは重要な役割を担っている。

きんぎゃんを通して、子どもたちは自らの住む地域や地域の大人と関わり、関係性を築く。それによって、地域の大人が子どもたちへの理解を示す。このような関係性の変容によって、子どもたちが生きやすい地域となっていく、いわば子どもの生活世界の変革が起きているのである。そしてこの子どもの生活世界の変革こそが、まさに子ども参画の本質の一つであると考えられる。

4-3. 両参画のかたちの共存

きんぎゃんでの子ども参画のあり方の最大の特徴は、上述した「子どもの居場所への参画」と、「地域への浸着としての参画」が共存しているという点にある。

日本の子ども参画実践の現状としては、極端に言えば、ただ「居場所づくり」へと突き進む事例と、「権利実現のための社会参加」へと突き進む事例とに二分化してしまっている。しかしきんぎゃんは、その程度の差はあるものの、両参画のあり方が重なりを持っている。それは、きんぎゃんが日常的な場であることで、多くの子どもたちにとっての居場所となっていくプロセスが生まれやすくなっているとともに、地域に開かれていることで常に地域との繋がりを持ち得る場となっているからである。そして、二つの参画が共存することによって、互いの参画の短所を補い合う。そこに真の子ども参画のあり方が見出されるのである。

また、両参画のかたちは明確に分類されるものではなく、グラデーションで表現し得るものであり、両参画のかたちが

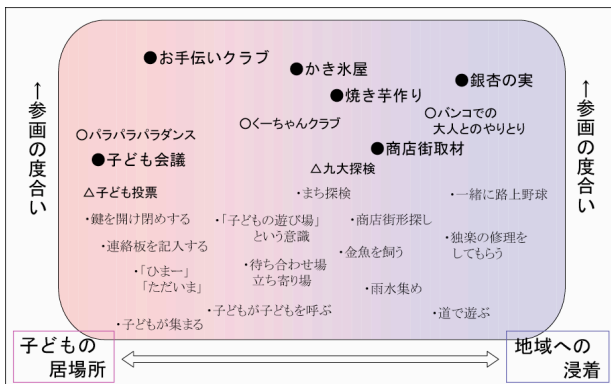


図3 きんぎゃんでのエピソードの全体像

共存している様相も明らかになった。図3が、結果と考察Iの全体像である。

5. 結果と考察II：大人の存在と場の様相

エピソードの中から、6つの代表的なエピソードを抽出した。そしてそれらに見受けられる大人の存在と場の様相を整理した。ここでは、「かき氷屋のエピソード」を提示する。

表1 かき氷屋のエピソードとその分析

【かき氷屋】のエピソード
<p>今日はきんぎゃんでのかき氷屋オープンの日だ。最初はスタッフ3名でかき氷屋をこなしていた。初めての作業であることに加え、予想以上の来客に、手一杯になってくる。最初は何味がいくつ売れたのかをメモしていたのだが、その作業も追いつかないほどの盛況ぶりだった。</p> <p>スタッフが周りもよく見えない状況になっていたときに、ある女の子二人(6年生のサトコとリエ。後で名前がわかった)が「これ、書こっか?」と言って、売り上げ数のメモを手伝ってくれ始めた。最初はそのメモだけを手伝っていたのだが、次第にお釣りの準備をしてくれたり、かき氷の器を洗ってくれたり、徐々に手伝いの範囲を広げていた。手伝ってくれる女の子も、いつしか4人に増えていた。</p> <p>4年生のトシコは、かき氷屋の最初のお客さんだった。その彼女が私に手伝いの許可を求め、かき氷屋を手伝ってくれている。楽しそうな表情ばかりではなく、きちんと責任を果たさなければいけない場面においては自ら注文を取ってくるなど、かなり真剣な表情をしていた。</p> <p>子どもたちで仕事を取り合う場面もあった。ただ、何をしなければならぬかを徐々に把握し始め(私たちがやっているのを見て)、いつのまにか指示を出してくれている子(サトコ)も出てきた。子どもがいつの間にか速くから注文を取ってくるようになってきた。こちらからの指示ではなく、自然と広がりを見せたのである。ただ、そのせいで混乱する場面もあった。注文の内容が錯綜したのである。自分が聞いた注文はきちんと配達したの?ということを私が誰に伝えるわけでもなく伝える。中心的な役割を担っていたサトコは、それを聞いて、他の子にも確認し始めた。</p> <p>その後、手伝いたいと言ってきた子がいた。でも「もういっぱいだから」とトシコは言う。自分たちがやっているんだという自負心からの発言だろうか。その子には他の部分で手伝ってもらった。子どもが活き活きし始めることで、大人の客もそれに惹きつけられてやってくる。ただ、「シロップが少なかった」とクレームを伝えてきたお客さんがいた。それを聞いて子どもたちもしゅんとした場面もあった。</p> <p>子どもたちは、かき氷のシロップの味に合わせた器の選択(色が何種類かあった)をしてくれるようもなった。彼女たちオリジナルの発想である。また、記録用に私が撮影していたデジタルカメラで、リエが撮影を始めた。中には自分たちが撮ったお金の写真も写されていた。</p> <p>ある程度お客さんが減ってきた頃には、彼女たちはきんぎゃんに立ち寄った子どもといつの間にか遊び始めている。そして子どもたちのかき氷屋は幕を閉じていた。(□04.07.10)</p>
<p>写真1 かき氷屋の様子</p>
<p>写真2 手伝いを始める</p>
<p>【分析のトピック】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「子どもたちの活動が始まる場面での大人の存在」：子どもたちが入っていくことのできる隙が生まれていた。 ・「大人の手から子どもの手への活動の移行」と「作業の周辺から中心への移行」が見受けられ、それらは重なりを持っていた。 ・「大人ならではの役割」があった。フォロー。共同する存在。 ・「子どもたちに変化」が見られた(没頭、役割分担)。本物に触れる体験。

このような各エピソードの分析を総括することで、図4が導き出された。子ども・大人・対象の関係を通して、子どもが主体的になっていく様相とそのプロセスをモデル化したものである。

[1] まず、大人が「子どもの活動を始める」のではなく、既に大人が活動に没頭しているからこそ生まれる際に子どもたちが入り込むというかたちで、子どもたちの活動が始まっていく。その際、子どもたちは対象だけでなく、大人の姿にも引き付けられる。

[2] 次に、子どもが活動に参加することで、子どもも大人も共に対象に関わる場が生まれる。その際、大人は子どもに作業を奪われる感覚を持ち得る。いわば子どもの存在によって、大人と対象との関係にズレが生じるのである。

[3] さらに活動が展開することで、子どもたちは生き生きとした姿（学び・充実感）を見せ、主体的になっていく。それと同時に、大人は一步引いた位置へと下がることによって、子どもを見守る役割を取るとともに、大人ならではの関わりを見せる。この大人と子どもの距離感が保たれることも、子どもの主体的な活動を支えるポイントの一つであると言える。この距離感、活動によってそれぞれ異なる。

全体を通してみたときに、大人は対象との関係性に一時ズレを生じつつも、子どもに巻き込み返されるかたちで、また同じ軸に戻っていく様子が見て取れる。また、活動にのめり込んでいく子どもの姿に巻き込まれる形で、他の子どもも活動に参加する様子も見受けられる。そして、子どもが活動に没頭し、徐々に対象に近づいていくその変遷が、まさに子どもが主体的になっていく軌跡として示されるのである。

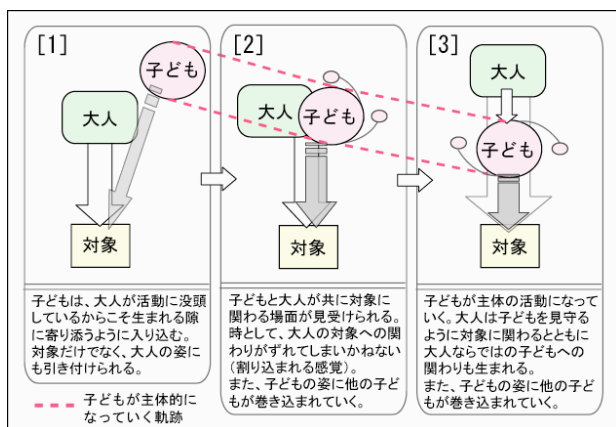


図4 子どもが主体的になっていく様相と大人の存在

また、活動が大人の手から子どもに移る際に、場を共有するための遊びや共同作業といった体験が媒介となっており、そこで子どもたちは本物に触れる体験をするということも見逃せない。

さらに、大人の存在があるだけで、活動が現実味を帯び、子どもたちの活動を促進するという面があるとともに、活動

が間違った方向に展開することが抑止される様子が見受けられた。加えて、大人にしかできないことをするという大人の存在の必要性も理解された。

このように、子ども・大人・対象の関係性が変化を見せながら、「大人の存在」が重要なファクターとなって、「子どもが主体的になっていく様相」が認められる。いわば、大人が主体であった活動が、子どもが主体の活動へと変遷していくのである。そしてそれこそが、子どもから始まる子ども参画の活動場面において求められるあり方であると考えられる。

6. 総括

6-1. 「拠点としての場」の重要性

以上の結果と考察から、地域に開かれた日常的な場面において、多くの子どもたちの居場所となり得る、子どもが関わっていくことのできる「拠点としての場」の重要性が浮かび上がってきた。文部科学省が2005年度より国の施策として推進している「地域子ども教室推進事業」は、日常的な場面での子ども参画の実現への追い風となり得る。ただその際に、子どもたちが居場所としての「地域子ども教室」のみに閉じるのではなく、その場が地域に大きく開かれ、多くの大人との関わりが生まれる場となることが欠かせない。

6-2. 子ども参画論・実践現場への還元

子ども参画論に対しては、子どもが主体的になっていく様相の一つのあり方を提示し、活動場面における（広い意味での）「大人の存在」の重要性を指摘することで、既存の子ども参画論には欠けていた視点を補った。さらに、真の子ども参画の実現のためには、両参画のかたちが共存することで、互いの短所が補完され合うことが重要であるということも指摘した。

子ども参画の実践現場に対しては、子どもたちの拠点としての場の重要性を主張した。また子どもが主体性を発揮して活動を始める際の十分条件として、活動が大人の手から子どもの手へ移行するプロセスを生むとともに、子どもが主体的になっていく様相を支える「大人の存在」や、「本物に触れる体験をすること」、子どもたちがお互いを巻き込み合う「多くの子どもたちに開かれた場」が提示された。

引用文献

- 1) Hart, R.A.: Children's Participation: From Tokenism to Citizenship, Innocenti Essays No.4, UNISF International Development Center, Florence, P5, 1992
- 2) 五十嵐牧子: 生涯学習における「子どもと大人の参画学習」の理念について、文教大学教育研究所論叢(9)、p.97, 2000
- 3) 古賀久貴: 「やってみよう」という気持ちからはじまること、子どもの参画情報センター編: 居場所づくりと社会つながり(子ども・若者の参画シリーズI)、萌文社、p.101, 2004